



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

紀要を読み比べて思うこと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堀内, 孝次 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3372

紀要を読み比べて思うこと

留学生センター長 堀 内 孝 次

昨年、これまでの紀要と年報を合冊にして新たな体裁で本誌を発刊したためか、体裁や内容の評価を思いながら今年も他大学のセンター紀要が気にかかった。1999年から2000年度にかけての各大学の紀要を見ていると、それぞれに大学の特徴がうかがわれて面白くなり、いつの間にか机上に十数冊を積み上げていた。そこで掲載項目と内容についての大学間比較によって本学留学生センター紀要の位置づけができるのではないかと考え、さらに資料を追加して若干の整理を試みた。紀要の体裁は、投稿文を論文、研究ノート、実践報告、論説・書評などに整然と分類している大学もあれば、全て区分なしで掲載している紀要もある。論文の内容についても、扱っている内容は実に多様である。論文全てが発音、母語、授業効果、教授法、文法、漢字といった日本語関係でまとめられている紀要や、一見、留学生センターの日本語教育とは関係が無いと思われるような浮世絵や現代文学の“性”問題あるいは思想分析と植民地誌など純粋文学的な研究論文が主体となっている紀要もある。また、日本語関係論文と純粋文学などの専門的研究論文が混在している紀要、あるいは調査研究に重きを置いているもの、さらにそれを論文と研究ノートに分けている場合がある。もっと細かく見ると論文に英文要約がある場合と無い場合があって、全体としては英文要約の付いていない紀要の方が多い。海外調査関係の論文が多く見られる紀要もあり、大学の特色を表しているようにも思える。この他、留学生事情、スピーチコンテスト、授業記録、留学生動向調査などの留学生活動を分析して実践報告の中で報告している例もあって、紀要から各大学の留学生センター教官の研究者像が浮かんでくるようで、実に興味深い。

さて、岐阜大学の紀要は上記のどの分類に該当するかと考えると、その体裁は論文を柱に報告、研究ノート、書評などの項目別に分類されており、論文内容は一般的な日本語研究を主に、その他、純粋文学などを含んでいる。本年度版も多様な内容の原稿が集まり、年報との合冊第2号として仕上がった。他大学との紀要比較の中でも標準的な編集体裁であると言えよう。投稿者であるセンター教官達は、その活動の多くの時間を年々増加する留学生達に対して大学院入学前の予備教育や日本文化・日本事情の教授、さらには生活指導の助言等に当てている。取り分け、大都市の大規模大学では出来ない手厚い留学生対応は、国立大学の中でも中規模・地方大学である本学の特色の一つとなっている。教官達はそのような多忙な教育活動の中で研究者としての証をこの紀要に示しているのである。その大いなる努力に改めて敬意を表したい。また、本センター活動に参加頂いている非常勤講師の方々にも、その投稿論文から研究者としての高い研究能力が読みとれ、本紀要の質的向上にも大いに貢献頂いていることに感謝したい。

ところで、紀要で発表された論文等を研究業績として評価する場合、その評価基準をどう考えるかは千差万別で、人によって極めて大きな違いがある。紀要を研究者の活動状況を一般に紹介する場として考える見方もあれば、純然たる研究内容の発表の場とする見方もある。前者の考えは大学内での研究活動を学内や地域をも対象に一般公開することにつながる。他方、後者については厳しい審査をクリアしなければならない専門学会誌に比べて、紀要では比較的確実に、かつ短時間で掲載される利点がある。いずれの立場をとるかによって紀要そのものの考え方にそれぞれの紀要の特色が出てくると思われる。研究的価値を重んじ、しかも論文作成に学会誌と同じエネルギーをかけ

るのなら専門性や雑誌のサーキュレーションなどを考慮して専門学会誌に投稿すべきだと主張する研究者もいる。しかし、誰もがそのように考えると紀要の必要性がなくなるのではないかと懸念する人もいる。また、そんなに堅苦しく考えることはなく、自分たちの研究活動を紹介することで良いと考える人もいる。近年、論文審査を厳しくして研究論文としての評価を高めようとしている紀要が少なくない。これについては各紀要の掲載論文や編集の内容をじっくりみると自ずからその重みが見えてくる。従って、個々の論文についての評価はその内容によって判断されるべきであろう。本留学生センターの紀要の掲載論文については、編集責任者の立場から客観的に見て、その内容の良さを高く評価しているところではあるが、各位におかれても本誌をご高覧の上、なお、ご批判頂ければこの上ない喜びであります。